

平成元年 1989年 創刊 No.431

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年3月号



Pieter Bruegel d. Ä. (um 1525/30 - 1569) Bauernhochzeit um 1567 Kunsthistorisches Museum, Gemäldegalerie © KHM-Museumsverband

杉本 純の原子力の話Ⅱ ウィーンと京都 No.164

杉本 純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長）

原子力人材育成ネットワーク（以下、「ネットワーク」）の主催による令和7年度「原子力人材育成ネットワーク」シンポジウムが、2月10日に日比谷国際ビルコンファレンススクエアおよびオンラインにて開催された。本シンポジウムは、我が国関係機関の相互協力に基づき各機関が一体となって各種の原子力人材育成活動・事業等を効率的かつ効果的に推進することを目的として、2010年11月に設立されたネットワークが例年開催することにより、原子力人材育成に関する情報共有と諸課題について議論を重ねてきた。今年度は、「未来をつくる中高生と原子力との出会い」および「原子力分野における人材育成に資するデータ収集と分析」をテーマとして、産業界・教育機関・研究機関等の技術者、教育者、研究者を中心としてオンラインを含めて約220名の参加があった。

増井秀企氏（ネットワーク運営委員長／日本原子力産業協会理事長）による開会挨拶の後、井上尚子氏（ネットワーク事務局長／日本原子力研究開発機構原子力人材育成・核不拡散・核セキュリティ総合支援センターセンター長）より、ネットワークの活動報告があった。続いて、ネットワークに新たに参加した日本核物質管理学会事務局の柴田修氏より同学会の紹介があった。

「Ⅰ.未来をつくる中高生と原子力との出会い（第一部）」セッションでは、若林源一郎氏（近畿大学教授）が座長を務め、田中香津生氏（加速キッチン合同会社代表／早稲田大学准教授）より「国内外の中高生を対象とした放射線探究オンラインサポート、加速キッチン」と題する講演があった。中高生による手作りの放射線測定器による国内外の活動が紹介された。この中で久保田佳歩さん（東京理科大学2年）より大学生メンターとしての活動が紹介された。続いて中村秀仁氏（Nプロジェクト代表／京都大学助教）より「科学を通じて社会と対話する新たな教育学の創生と非認知能力の劇的な向上」と題する講演があった。高校生を対象に放射線を題材に手描きで整理したスケッチブックを手にも市民と対話する学習の確立と社会実装の取組が紹介された。

午後からの「Ⅱ.未来をつくる中高生と原子力との出会い（第二部）」セッシ

ョンでは、小向夕紀氏（東芝エネルギーシステムズ・マネージャー）が座長を務め、飯本武志氏（国際原子力科学技術アカデミー（INSTA）首席秘書官／国際原子力科学オリンピック（INSO）日本代表選手団出場支援委員長／東京大学教授）より「興味と挑戦が加速する次世代層のために新たなプラットフォームを-INSTAとINSO-」と題する講演があった。2025年8月にマレーシアで開催されたINSOへの日本選手団の初参加経緯と結果、並びにINSTAの活動が紹介された。また、佐々木柚榎さん（第2回INSO日本代表／UWC Adriatic 1年）より「第2回国際原子力科学オリンピック 日本代表選手として」と題するINSO参加で得た体験の報告があった。

「全体質疑」後の「Ⅲ. 原子力分野における人材育成に資するデータ収集と分析」セッションでは、和田裕子氏（日本原子力産業協会人材育成部長）が座長を務め、永田夏樹氏（日本原子力文化財団副長）より「『原子力に関する世論調査』2024年度調査結果のご報告」、藤原尊徳氏（日本原子力産業協会）より「原子力関連学科・専攻の学生動向ならびに原子力関連企業・機関の採用状況調査（2025年度報告）」、および澤木汐里氏（日本原子力産業協会）より「原子力発電に係る産業動向調査2025（2024年度対象調査）について」とそれぞれ題する報告があった。最後に上田光幸氏（日本原子力研究開発機構理事）より閉会の挨拶があった。大学等での素晴らしい取組や国際原子力科学オリンピックでの我が国選手団の優れた成績（全4選手がメダル獲得：金1、銀2、銅1）、並びに人材育成に関する貴重なデータ収集と分析が紹介されるとともに、フロアを中心として活発な討論があり、意義深いシンポジウムとなった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の3月のイベントを紹介したい。ウィーンでは、復活祭へ向かう四旬節の期間が静かに街を包む。キリスト教における節制と内省の時として、中世以来受け継がれてきたこの季節には、食や娯楽を控え、心身を整えるという意識が今も息づいている。近年では宗教的意味合いに加え、生活のリズムを見直す機会として受け止める市民も多い。また、この時期には春の訪れを告げるイースター・マーケットがシェーンブルン宮殿前などで開かれ、彩色卵や工芸品が並ぶ。慎みと希望という相反する要素が共存する光景は、冬から春へと向かうヨーロッパ的時間感覚を象徴している。

一方、京都では3月3日のひな祭りが春の訪れを告げる。平安時代の上巳の節句に由来するこの行事は、人形に穢れを託して祓うという古い信仰を起源とし、やがて女兒の健やかな成長を願う祝祭へと発展した。京町家や寺院では雛人形が飾られ、雅やかな王朝文化の面影が静かに再現される。紙雛や下鴨神社で行われる棧俵に乗せた雛人形を御手洗池に流す流し雛の風習は、災厄を遠ざける祈りの形でもある。桃の節句とも呼ばれるこの日は、自然の兆しと人生の

節目とを重ね合わせる日本的感性を今に伝えている。華やかな飾りの背後には、季節の変わり目を慎重に受け止めてきた京都の文化的基盤が感じられる。

ウィーンの四旬節が内省と復活への準備を意味するのに対し、京都のひな祭りは祓いと成長への願いを象徴する。背景となる宗教や思想は異なるが、いずれも春の到来を前に、人々が心を整え、時間の節目を意識する行事である点は共通している。静けさの中に宿る期待と祈り、3月という転換の月に両市はそれぞれの伝統と文化を通じて、来るべき春へ向けての扉を開く。

余談であるが、筆者は本年も同シンポジウムに参加した。原子力に限らず我が国の工学系には女性が少ない課題があることから、中高生を対象とした加速キッチンについて女生徒参加の割合について質問をした所、高割合であるとの回答があり希望が持てた。ウィーンではシェーンブルン宮殿前のイースター・マーケットを観たことがある。京都では京都島津で華やかな雛人形を見た。今月も両市の3月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、シェーンブルン宮殿前のイースター・マーケットの写真を掲載させていただく。



「原子力人材育成ネットワーク」シンポジウムの様子」<https://jn-hrd-n.jaea.go.jp/backno03.php>



ウィーンのイースター・マーケット - wien.info